沖縄県護国神社社報

うむい 四号

特集

学徒たちの沖縄戦

『梯梧学徒隊』

社報「うむい」について

沖縄の言葉で「思い、願望、考え、所存」のことを「ウムィー」といい、戦争で亡くなっていった人達の思い、そして残された遺族、戦友達の思いを次の世代へと継承すべくつけられた名前。

日清戦争以後、敢然と国難に立ち向かっていった先人たちの尊い精神が、この「うむい」を通して末代まで受け継がれ、真に戦争の無い平和な世の中になるようにとの願いが込められている。

表紙写真（安田淳夫氏撮影）
［悌梧の花］

目次

英霊の言乃葉……3
護国神社この一年……4
特　集
　学徒たちの沖縄戦……6
　「梯梧女子学徒隊」
永代祭申込者御芳名……14
永代祭御供奉納者御芳名……14
（命日の御供料奉納者）
新参集殿御造営奉賛金奉納者御芳名……15
今に残る激戦の跡……17
社務日誌抄……20
御奉納一覧……21
編集後記

英霊の言乃葉

遺　筆

陸軍大尉　倉元利雄命

昭和二十年五月十一日
沖縄島周辺にて戦死
鹿児島高等商業学校卒
鹿児島県出身　三十歳

喜美子

出発の時は許して呉れ、御許を愛すればこそ一時をも悲しみをさせたくない心にて一杯だつた。決して嘘を言ふのではなかつた。

どうか元気を出して凡ゆる苦しみ、悲しみと闘つて行つて御呉れ、強い心で生きて行つて呉れる事を切に切に望む。

では只今より出発する。有難う。有難う。

俺は幸福だつた。喜んで征く。御許の幸福と健康を祈る。

五月四日五時十二分

愛児よ

若し御許が男子であつたなら

御父様に負けない

立派な日本人になれ

若し御許が女子であつたなら

気だてのやさしい女性になつて呉れ

そして御母様を大切に

充分孝養をつくして御呉れ

父より

愛児へ

【平成五年十一月靖国神社社頭掲示】

護国神社この一年

[第四十四回秋季例大祭]

平成十四年十月二十三日、第四十四回秋季例大祭が御遺族、崇敬者約五百人の参列のもと、定刻の午後一時、大祭開始を知らせる太鼓の合図とともに祭典が斎行され、斎主又吉眞興宮司の祝詞奏上に続き、大祭委員長代理大城英男副会長、沖縄県遺族連合会会長座喜味和則氏が祭文を奏上した。また、MOA山月光輪花より献華が奉納された。

祭典には、靖國神社宮司を始め神社本庁統理、日本遺族会会長、全国護國神社会会長ほか全国各地から慰霊電報及び祭詞が寄せられた。

[大祓式]・[除夜祭]・[歳旦祭]の斎行

平成十四年十二月三十一日から平成十五年一月一日にかけ、「大祓式」・「除夜祭」・「歳旦祭」が斎行され、新しい年に向けての祈願が行われた。

また、大晦日から元旦にかけ御社殿前に設けられた特設スタジオから恒例の民放ラジオの生放送が行われ、多くの参拝者で賑わった。

[第四十五回春季例大祭]

平成十五年四月二十三日、第四十五回春季例大祭が斎行された。秋季同様、約五百人の遺族、崇敬者が参列し厳粛に祭典が執り行われた。

祭典では、裏千家淡交会沖縄支部よりお茶の奉納が行われ、また航空自衛隊那覇基地太鼓部による奉納太鼓も行われた。

[戦没者総合慰霊祭]

平成十五年六月二十三日（慰霊の日）、戦没者総合慰霊祭が斎行された。正午の時報に合わせて黙祷がささげられ、御遺族多数が列席する中、斎主又吉眞興宮司のもと祭典が厳粛に執り行われた。

[殉国英霊顕彰祭（みたま祭り）]

平成十五年八月十五日正午より、神社、英霊にこたえる会沖縄県本部、沖縄県遺族連合会主催による「みたま祭り」が斎行された。正午の時報に合わせて黙祷がささげられ、斎主又吉眞興宮司によって、御遺族、各種団体崇敬者列席のもと祭典が厳粛に執り行われた。

祭典には、玉城流翔節輪の会会主知念範紺氏より、琉球舞踊「柳」が奉納された。

《これからの予定》

- 平成十五年十月二十三日「第四十五回秋季例大祭」
- 平成十五年十一月十五日「七五三詣で」（十一月中受け付け）
- 平成十五年十一月二十三日「新嘗祭」
- 平成十五年十二月三十一日「大祓式」・「除夜祭」
- 平成十六年一月一日「歳旦祭」
- 平成十六年一月三日「元始祭」
- 平成十六年四月二十三日「第四十六回春季例大祭」
- 平成十六年六月二十三日「戦没者総合慰霊祭」
- 平成十六年八月十五日「殉国英霊顕彰祭（みたま祭り）」

第3回「沖縄昭和女学校」
―悌梧（でいご）学徒隊―

特集

学徒たちの沖縄戦

●学徒隊について

沖縄戦では正規の兵隊の他に「ひめゆり学徒隊」「鉄血勤皇隊」に代表される、下は十二～十三歳、上は十八歳からなる旧制中学、師範、高等女学校在学中の男女学徒が動員され、最前線で通信、観測、看護等の任務につき、その多くが犠牲となった。

ここでは「学徒たちの沖縄戦」と題して、各学校ごとに若くして散っていった男女学徒たちの足跡をたどり、彼らがどのような「想い」をもって戦場へ赴き、どのような体験をしたのかをたどり、亡くなっていった学徒たちに鎮魂の誠を捧げたい。

●沖縄昭和女学校の沿革

私立沖縄昭和女学校は昭和七年四月、山梨県出身の八巻太一氏が、小学校校長、師範学校教諭等の経験を生かし、県内女子の社会進出と自立を目指し那覇市崇元寺町（現那覇市泊）に開設した女学校である。

同校は人格教育と商業教育を教育方針に掲げ、社会、国語などの普通科目のほかに和・英文タイプ、簿記、そろばん等の実技講習にも力を注ぎ、また本科以外にも専修科、講習科が併設され、多くの女子が同校で学び職業婦人として県内外ほか満州へと巣立っていった。

当時の校舎は十・十空襲の被害を逃れたが、軍の倉庫として使用されたために、学校を崇元寺に移し授業が行われた。現在は住宅地となっており、当時の面影を辿ることは難しい。

校門

悌梧（でいご）学徒隊

校章である崇元寺の梯梧の花にちなみ「梯梧（でいご）学徒隊」と呼ばれた。

昭和二十年に入ると、米軍の沖縄上陸はほぼ間違いなしとして、沖縄守備隊は正規の兵士以外にも多くの県民を徴用し、その上陸に備えるようになっていった。

それは女子学生にも及び、昭和高女では一月下旬より第六二師団野戦病院所属の軍医と衛生兵が仮校舎に派遣され、三、四年八十名余に看護教育が行われた。

三月六日、首里赤田にある同野戦病院に学徒看護隊として正式に十七名が入隊し、首里高女（ずゐせん学徒隊）の生徒と共に本格的な訓練を受けることとなった。そこでは点呼、宮城遥拝、軍人勅諭等軍隊同様厳しい訓練が行われ、講義、手術見学、実習のほか、壕堀り、衛生器具の梱包なども課せられた。

そして、三月二十二日より南風原村新川の通称「ナゲーラ壕」に構築された野戦病院へ配置された。

ナゲーラ壕入口

四月一日、米軍が沖縄本島へ上陸した後、負傷兵の搬入が徐々に増え始め、七日頃から負傷兵の数はいっきに増加し、治療はおろか、その収容さえ出来なくなっていった。

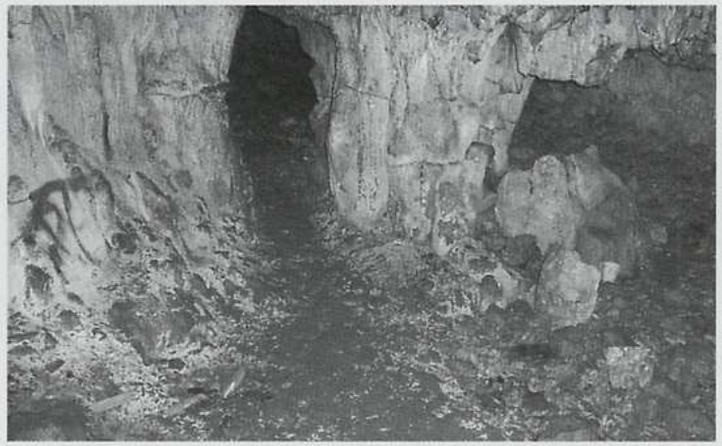
病院壕入口は小高い丘陵地の斜面

に位置し、負傷兵を運ぶトラックは壕から離れた地点までしか進めず、そこからの搬送は専ら女子学徒や看護婦に委ねられ、五〇〇メートルはあろうかと思われる急な下り坂をわずか二人の女子で重傷者を運ぶ作業は、並大抵の事ではなかった。しかし彼女達は傷ついた患者のことを思い、歯を食いしばって搬送し続けていった。

急な坂道

野戦病院内では負傷兵の看護、手術の手伝い、ローソク持ち、包帯の交換、傷口の消毒等に従事したが、特に傷口の消毒時には、傷口に集まる「ウジ」に学徒たちは悩まされていた。

四月十七日、ナゲーラの壕が満杯になったため那覇市識名の自然壕へ分室を開設することとなり、昭和高女からも九名が移動することとなった。


識名の壕（この場所で学徒２人の他多くの犠牲者が出た）

四月二十九日、ナゲーラ壕内への砲撃により照屋タマ子が戦死した。梯梧学徒隊最初の犠牲者で、同じ砲撃によって首里高女からも一人の犠牲者が出、悲しい天長節となった。

五月十三日、識名分室の壕入口近くで炸裂した爆弾の破片が、壕内の手榴弾に触れ爆発。その爆発により饒波八重子、前川清子の二人の学徒が死亡し、他にも看護婦三名を含む多くの部隊員が犠牲となった。

五月の末になると戦況はさらに悪化し、全部隊は本島南部へ移動することとなり、ナゲーラの壕と識名の分室も閉鎖し、南部へと移動することとなった。

始めに武富（現糸満市）の壕へ移動となったが、移動は夜間に行われ、砲弾と降り続く雨の中転びよろめきながら、その上患者に付き添いながらの行軍は困難を極め、わずか数キロの距離が途方も無く長く感じられたのであった。

途中、識名から撤退した隊員らは死の橋と呼ばれた一日橋（現那覇市と南風原町の境付近）を通過した。その時、敵の集中攻撃を受け、すぐ近くに砲弾が落下し危うく全滅しそうになった。

かろうじて武富の壕に到着した部隊は、そこで医療器具を処分し、すぐに南部へと移動することとなった。

五月三十一日伊原の壕（糸満市）へ到着する。しかしそこでは手術はおろか、医療行為などの活動は行われず、患者を安置するのみの状態で、病院としての機能はすでに停止していた。

六月八日頃、兵士より学徒等の解散が告げられ、梯梧学徒隊、首里高女のずいせん学徒隊、看護婦ら十四、五名が壕から出ることとなり、各々が数名単位で北部方面、港川（玉城村）へと脱出していった。闇夜の中、どこへ向かっていいのか解らぬままさまよい歩いているうち、大山昌子、金城初枝、田港文の三名が行方不明となり、永遠の別れとなった。

その後、あまりの砲撃の激しさに残った梯梧学徒隊は元の壕へ戻った。

ある日、「シュー」という不気味な音と同時に大きな爆弾が滑り込んできて、皆の輪の中で止まった。幸い不発弾であったため、大惨事は免れたが、一人の学徒が頭部に落石を受け無傷のまま亡くなっていた。

六月中旬、突然起こった迫撃砲による、もの凄い集中攻撃によって、仲栄眞米、大城キヨが生埋めになって亡くなり、山川マツは何とか一命を取りとめたが、記憶を失い意識朦朧の状態となった。また、深夜壕出口付近に居るとき迫撃砲による攻撃を受け、島袋文が大腿部破損による出血多量により、苦しみながら亡くなった。

六月十八日米須の本部壕に到着。しかし翌十九日賀谷支隊長から解散命令が出され、壕を出た学徒の多くが砲弾の犠牲となっていった。

この戦いにより、梯梧学徒隊十七名中四名が途中帰宅、九名が犠牲となり、軍と共にし最後まで生き残った者は四名であった。

現在最後の地である米須に「梯梧の塔」が建立され、上記九名を含む、沖縄戦にて亡くなった職員、同窓生合計六十二柱が祀られている。

分院としての識名の壕

稲福　マサ

私達八班の九名と、衛生兵、看護婦約三十名は、第二分院として識名に配置が決まった。

首里ナゲーラの壕を出たのは、四月十七日頃であったと思う。清い空気を思う存分胸一杯吸いながら、トラックに揺られ識名へ移動した。外気に触れるのも久しぶりの事で「ああ生きているんだ」と、気分は晴れやかである。

まだ、収容患者もなくのんびりとくつろぐことができ、食事も徴用できていた四、五人の女性達が臼でついた白米ご飯は、特別美味しく舌鼓を打った。平和な生活を楽しんだのも束の間で情勢は一変し、前戦からの負傷兵が次々と移送されてきた。

四月二十九日は、天長節で日本軍は、この祝日に総攻撃をかけると聞いて勝利を期待していたが何の音沙汰もない。夜も更けた頃、ナゲーラの壕からの伝令が来て悲しい知らせが入った。照屋玉子さんが、心臓近くに破片を受け、出血多量で亡くなったと言う。学友の最初の犠牲者である。とうとう学友にも犠牲者が出た事で、戦争の恐ろしさを実感し、悲しみに暮れ涙がとめどなく流れ、次は我が身かもと不安になった。

戦況は激化し、最前線は中部の西原、幸地、浦添仲間あたりで患者が次々と移送されてきた。負傷の状態もさまざまで、全く地獄図を見ているようであった。右大腿部をめちゃくちゃにやられた患者は出血がひどく瀕死の状態で、すぐに切断の手術にかかり骨を切断する時の、ノコ切りのいやな音に身の毛がよだった。切り離された足は白いガーゼをかけ地面に置かれ、それを見た学友はびっくりして大声を出して逃げて行った。

毎日、悲惨な光景を目のあたりにすると、何時のまにか慣れてしまう。そんな自分が自分でなくなるような気がして怖くなった。

増える一方の患者に、腰を下ろして休むこともないぐらい多忙な毎日である。皿にラードを入れ綿地で芯を作り、ランプの代わりにしていたが、薄暗い中で、誰の顔を見ても煤だらけで真っ黒である。「貴女の顔も鼻も真黒よ。」「あなたもよ。」とお互い笑ったが、やはり若い女の子だけに恥ずかしい。

五月十三日、私にとっては一生忘れられない日となった。看護婦と二人で宵番へ行く準備をしていると、前川さんがなにげなく「浜元さん、二人着物の交換をしよう。」と言うので、私も迷うことなく、「いいよー。」と返事をして、前川さんが着ているモンペの上着と、私は叔母の形見にもらった浴依と交換した。それから、私は深夜の当番へと出ていった。

勤務を終え帰って来ると、みんな就寝中で静かである。相勤の看護婦と二人で食事を済ませ、次の勤務時間までの間、一眠りすることにした。学友と雑談しながら眠るのも楽しく、郷里も同じ国頭郡というよしみもあって、何時も前川清子さんと饒波八重さんとの間に眠ることにしていた。その日もそうするつもりであったが、その日に限って目が冴え眠れないので裁縫道具を持って壕の中間にある炊事場へといった。縫い物をするんでもなく雑談をしていたら、一人の兵隊が、「入口がやられた。」と血相を変えて入ってきた。私は茫然としたまま身動きができず、しばらくして「どうなっているの？」と聞いた。一人は即死で何名かの負傷者が出たという。暗闇の中、手探りで入口の方へ急いだ。途中負傷者が血を流しながら治療室へと行く。前川さんが即死で、饒波さんと城間敏婦長は重傷だと聞いた。私は動悸で息苦しくなった。入口は硝煙の臭いがしてごったがえしている。前川さんの寝る場所は決まってピアノの側だったのですぐ分かった。変わり果てた親友を見て私は棒立ちになって声も出ない。一体この様は…。前川さんは腹部直撃で即死である。そばで唸っている饒波さんは、左顔面をえぐられ、腕、胸部、足と惨憺たる状態でありながらも全身から絞り出すようにかすかな声が聞こえる。「饒波さん、饒波さん、言いたいことがあるの？言ってごらん。」「国頭へ帰ったらね…。」後は声にならない。「饒波さん、饒波さん、何よーもう一度言って…。」私は懸命に揺すりながら後の言葉を聞こうとしたが、とうとう息を引きとってしまった。

思い出す度に、恐怖と悲しみに明け暮れた日々を忘れたいと思いながら、忘れると、亡くなった学友も忘れることになる。悲劇の事実を残す為にも、遅きに失しながら平和であることは、人間にとっていかに大切かを、これからの若い人達は、社会に目を向け、二度と人間性を失うことのないよう心から願い、胸中の思いを筆に託した。

戦争と弟の死

吉川　初枝

昭和二十年四月二十九日、私達梯梧隊七班は其の日の勤務を終え経理の壕入口に立ったまま「今日は、天皇陛下の誕生日だね」と、天長節の歌を口ずさみ乍ら雑談をして居た其の時、突然轟音と共に大地がゆれ、土と一緒に破片がバラバラと雨あられのように降って来て壕の中が真暗になった。其の時照屋さんが、「我喜屋さん我喜屋さん手がきれている手がきれている」と大声で泣き叫んで居る。壕に入って明かりをつけてみると、照屋さんは心臓をやられたのか、まるでホースから勢いよく水が出ているように、血がほとばしって居た。石川軍曹が、サラシの布を照屋さんの胸にグルグルまきつけ、急いでだきかかえて、医務室へ運んで行った。殆ど即死状態で、其のまま息をひきとり、帰らぬ人となった。私達学徒隊最初の悲しい犠牲者となった。

五月の中旬（ナゲーラの壕）萩原中尉殿に呼び出され何事かと思って集まってみたら、近くに家族が居る者は、帰っても良いとのお話だった中尉殿の許しを得て家族の許へ帰る事にした。中尉殿の暖かいお気持ちで、お米、金銭、証明書には（石部隊野戦病院学徒隊）。と書かれているのを戴いて、友人と二人で壕を後にした、烈しい弾の中を、死に物ぐるいで母の居る（球四四旅団本部炊事班）大里の壕へと向かった途中幾度となく危険な目にあったが、兎にかく無事につく事が出来た。然し母の部隊はそこには無く、すでに糸数の壕（アブチラがま）に移動した後だった。糸数の壕で母や弟と無事を喜び合った。

六月一日糸数の壕も危なくなったので移動する事になった。弟は球七〇七三部隊工兵隊に所属して居た。ようやく具志頭仲座の壕に着く事が出来た。仲座には弟も一緒に移動した。弟は工兵隊の兵隊と首里まで行ったが、余りの砲弾の烈しさに隊長殿が、君は帰って、食料倉庫の番をして居るように云われ日本刀を下さったとの事で自分は家族と行動を共に出来ない。兵隊に行かしたつもりで、自分の事は諦めてくれと云った。母は私が怪我をしているので、どうしても一緒に行って呉れと頼んだ。しかたなく弟はついて来たのだった。しかし間もなく仲座の壕も危なくなったので兵隊に南部に下った方が良いと云われ六月十三日、炊事班の人達もふくめ十三名が壕を出た、しばらく行くと上空では偵察機（トンボ）が音もなく旋回していたので、畠の側の農具小屋にかけこんだ。その時、烈しい迫撃砲を撃ち込まれ、小屋諸共吹飛ばされた。どれ位の時が、経っただろうか、弟の呻き声で我に帰り起き上がろうとしたが、背中に大きな百キロ位の鉛にでも押しつぶされるようで起き上がれず、自分もやられた事に気づいた。即死した者、怪我した者、母が弟をおぶって、何人かの呻き声を後に歩ける人だけで、元の壕にもどって行った。弟の怪我の様子を見ると、体全体傷だらけで、特に右半身は大変な重傷であった。私は背中半分をえぐり取られ動けなく、咳をする度に口から血のかたまりが出た。母は表面上は傷はないものの爆風で頭をやられて耳から血が流れていた。翌日から弟は、うわごとで、とりとめのない言葉を発し始めた。もがき苦しみ錯乱状態になりとうとう十五日に息を引取った。

夜になって母と外の二人と（一人は軍医）三人で水汲みに行き、井戸の側まで行った時、機関銃をうたれ、三人がバラバラになった。暫くして母は二人の連れとまちがえて、二人で立っているアメリカ兵の所へ自分から進んで行った。腰をぬかさんばかりに吃驚したと云う。そこでそのまま捕虜になった。

母は私の事が気になり、アメリカ兵に子供を壕に残して来たので連れて行きたいと、手まね、足まねで言った所、初めは、だめだと断っていたけど、後になって「早く連れて来い」と云う事で、母に連れられて四人が一緒に具志頭の学校前についた。そこから次々に車に乗せられて、知念村の志喜屋部落に着いた。一年位後に弟の遺骨を収骨し、改めて悲しさがこみ上げて来た。

母はどんな思いで弾の中を、一人息子の為に一人で穴を掘り、一人で弟を葬ったのあろうかと当時の母の姿と心を思いおこす時、何とも云いようのない、胸の痛みと息苦しさを感じるのである。

戦争は人々から一番大切なものを、うばい、生き残った者達の希望と生き甲斐をも失わせる。人間が悪いのではなく戦争そのものが人の心をかえてしまいます。戦争は二度とあってはならない。平和な戦争のない世の中にするためにも、私のつたない、とりとめもない体験をすべての人々に訴えたいと思います。

永代祭申込者御芳名

（平成十四年九月一日～平成十五年八月三十一日）

・広島県安芸郡　高橋正明様
・沖縄県那覇市　与儀シゲ様
・沖縄県宜野湾市　許田ヨシ様
・大阪府大阪市　柿木克己様
・北海道函館市　橋本ミツ様
・滋賀県滋賀郡　福永　博様
・千葉県柏市　早坂正子様

永代祭御供奉納者御芳名（重複掲載有り）

（平成十四年九月一日～平成十五年八月三十一日）

・沖縄県浦添市　濱松　昭様
・愛知県小牧市　橋本かや様
・沖縄県那覇市　仲村致慶様
・群馬県渋川市　木村文平様
・広島県呉市　渡部妙子様
・広島県広島市　本多千里様
・愛知県刈谷市　丹村要二様
・静岡県焼津市　松田まさ様
・岐阜県益田郡　熊崎つや様
・北海道札幌市　浅田興屋様
・北海道網走郡　成田静子様
・奈良県生駒市　荒川文子様
・沖縄県那覇市　高江洲愛子様
・北海道江別市　田村文雄様
・三重県松阪市　野村一子様
・佐賀県杵島郡　千綿ミエ様
・沖縄県那覇市　高江洲愛子様
・北海道札幌市　浅田興屋様
・東京都武蔵村山市
・北海道札幌市　渡辺三郎様
・北海道札幌市　豊川エイ様
・北海道札幌市　門馬和子様
・北海道札幌市　北村たか子様
・北海道札幌市　大浦慶子様
・北海道余市町　木村シズ子様
・北海道札幌市　鶴原正規様
・北海道足寄郡足寄町　大竹口重幸様
・山口県宇部市　平原清恵様
・沖縄県那覇市　屋良朝正様
・北海道古宇郡泊村　澤田政枝様
・愛知県一宮市　原　江つ様
・神奈川県横浜市　久保井淑子様
・愛知県犬山市　吉野幸雄様
・愛知県海部郡　石垣治三様
・北海道川上郡　小野瀬雅子様
・三重県志摩郡　杉木茂樹様
・北海道札幌市　鳴海美栄子様
・北海道札幌市　櫻井朋子様
・佐賀県伊万里市　條島源吾様
・滋賀県津市　吉川つや様
・北海道札幌市　櫻田スミ子様
・岐阜県岐阜市　江崎明美様
・岩手県盛岡市　瀬川　淳様
・山口県宇部市　上田　喬様
・北海道札幌市　絹川美智子様
・北海道川上郡　清野吾郎様
・愛知県豊橋市　杉浦文子様
・北海道松前郡　戸田　愛様
・沖縄県糸満市　瀬名波初様
・北海道函館市　伊藤和子様
・愛知県中核市　加糖志ず様
・奈良県天理市　切田京子様
・岩手県花巻市　瀬長タエ様
・大分県玖珠郡玖珠町　中島美千代様
・福岡県春日市　大橋温子様
・愛知県南設楽郡　石野子里様
・東京都江戸川区　岡田昌久様
・神奈川県横浜市　高津菊枝様
・山梨県甲府市　佐藤ひでの様
・熊本県山鹿市　阿部ハツ子様
・福岡県大牟田市　小柳昌敏様
・兵庫県伊丹市　木本　進様
・東京都八王子市　石上順子様
・北海道川上郡　田島義勝様
・沖縄県那覇市　仲村致慶様
・茨城県取手市　大塚幸男様
・北海道札幌市　鈴木名香子様
・北海道上川郡　阿部辰巳様
・北海道根室市　松原マツ様
・北海道札幌市　植松　香様
・東京都荒川区　川俣雄弘様
・宮城県黒川郡　菅原秀子様
・神奈川県横浜市　松本敬子様
・北海道札幌市　北村孝子様
・北海道苫小牧市　鈴木武夫様
・石川県小松市　南出春子様
・北海道札幌市　鳴海美栄子様
・北海道河西郡　森　正子様
・岐阜県恵那郡　岡山孝平様

・東京都中野区　佐々木禎助様
・神奈川県横浜市　山本太一郎様
・愛知県稲沢市　川口日出様
・岡山県津山市　石野美芳様
・佐賀県三養基郡　立石博義様
・熊本県熊本市　松尾雪子様
・広島県広島市　児玉光晴様
・愛知県豊橋市　牧　清様
・静岡県焼津市　松田まさ様
・愛知県一宮市　後藤修士様
・北海道北見市　十良沢義治様
・京都府八幡市　斉藤金蔵様
・愛知県豊橋市　小野すみゑ様
・北海道川上郡　村上義雄様
・福島県二本松市　安田信吉様
・徳島県徳島市　田中静子様
・愛知県名古屋市　近藤義文様
・神奈川県横浜市　黒木正敏様
・愛知県岡崎市　内藤はる子様
・滋賀県甲賀郡　宿谷長次様
・北海道札幌市　加藤　勤様
・北海道苫前郡　土田千代様
・和歌山県那賀郡　藤川嘉寿子様
・北海道音更町　高橋　仁様
・愛知県海部郡　黒田幸和様
・千葉県市川市　気田一郎様
・福岡県柳川市　松永　修様
・大阪府堺市　中川小夜子様
・三重県伊勢市　恵　親也様
・愛知県稲沢市　松井重男様
・北海道札幌市　下田方子様
・福井県福井市　浅田興屋様
・北海道札幌市　野阪重信様
・愛知県津島市　川上ふさゑ様
・沖縄県浦添市　加藤恵一様
・沖縄県那覇市　濱松　昭様
・沖縄県中城村　平田禎子様
・群馬県高崎市　早坂正子様
・滋賀県栗太郡　高橋正明様
・沖縄県浦添市　川田江勇様
・沖縄県那覇市　安里　勲様
・沖縄県那覇市　堀池四郎様
・千葉県柏市　上原艶子様
・福島県喜多方市　深町フジノ様
・愛知県犬山市　島仲　彌様
・徳島県徳島市　宮平オトメ様
・愛媛県松山市
・熊本県熊本市
・沖縄県島尻郡南風原町
・沖縄県糸満市

《新参集殿御造営奉賛金奉納者御芳名》

（平成十四年九月一日から平成十五年八月末日までの御奉納者）

金弐百萬円

・沖縄県那覇市　加治順人様

金参拾萬円

・徳島県阿南市　幸田かね様

金壱拾萬円

・沖縄県那覇市　松島　寛容様
・愛媛県松山市　河本カヲル様

金五万円

・熊本県熊本市　松尾雪子様
・沖縄県島尻郡南風原町　うるま印刷様
・沖縄県糸満市　徳元洋真様
・北海道北広島市　仙北谷ミネ様

金四万円

・北海道函館市　伊藤和子様

金参万円

・沖縄県国頭郡恩納村　島袋ミツ様
・北海道松前郡松前町　戸田　愛様
・愛知県知多郡南知多町　髙木寅一様
・千葉県佐原市　榊原　潔様
・沖縄県那覇市　仲村致慶様
・愛知県岡崎市　加藤志ず様
・北海道札幌市中央区　黒川善一様
・大分県玖珠郡玖珠町　中島美千代様
・財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会様

金弐萬円

・北海道江別市　田村文雄様
・北海道川上郡標茶町　小野瀬雅子様
・神奈川県横浜市南区　久保井淑子様
・滋賀県近江八幡市　平尾貞幸様
・神奈川県藤沢市　辻　功様
・財団法人長崎県連合遺族会様　田中昭二様
・福島県喜多方市　小倉　勇様
・愛知県犬山市　トーマ産業株式会社様
・沖縄県島尻郡南風原町　村上真喜子様
・和歌山県和歌山市　中村三郎様
・群馬県甘楽郡下仁田町　神谷操子様
・北海道札幌市南区　井上十重子様
・北海道札幌市厚別区　井上瑾子様
・北海道樺戸郡月形町　鶴原正規様
・北海道札幌市厚別区　土田千代様
・北海道苫前郡苫前町

金壱万円

・沖縄県沖縄市　西平ヨシエ様
・沖縄県那覇市　与儀シゲ様
・沖縄県中頭郡勝連町　平良一男様
・屋良の友の会会長　石黒光信様
・北海道根室市　松原マツ様
・沖縄県那覇市　山川カメ様
・北海道札幌市北区　中村キク様
・沖縄県浦添市　前原盛祥様
・北海道茅部郡南茅部町　佐藤武司郎様
・岡山県岡山市　羽布津麗子様
・千葉県東金市　高山友二様
・埼玉県さいたま市　湯澤　貞様
・三重県伊勢市　外山とめ様
・滋賀県栗東市　村上カヨ様
・和歌山県和歌山市　芝本末一様
・福井県坂井郡丸岡町　大城ときを様
・群馬県伊勢崎市　神尾ひろ様
・東京都国立市　大江照夫様
・奈良県天理市　奥田義次様
・福島県いわき市　渡辺勝美様
・愛知県一宮市　稲垣ふさ様
・岡山県津山市　石川美芳様
・千葉県千葉市　布施　茂様
・群馬県勢多郡大胡町　江原はつ様
・北海道帯広市　蓮井俊夫様
・京都府船井郡丹波町　畑中耕治様
・愛知県一宮市　白木栄太郎様
・北海道千歳市　工藤イク様
・北海道石狩市　久門国雄様
・山三四七五部隊第二大隊北海道戦友会　佐々木栄様
・前田高地平和の碑北海道遺族会　鶴原正規様　柳田光一郎様
・沖縄県糸満市

金五千円

・大阪府高槻市　玉川正久様
・山三四八七部隊に縁のある方

お知らせ

沖縄県護国神社御創建七十周年記念事業

新参集殿御造営の延期について

沖縄県護国神社では、御創建七十周年記念事業と致しまして、狭小、老朽化しました現在の社務所、参集殿、倉庫をひとつの建物として集約し、御高齢となられた御遺族、戦友の方々が安心して参拝できる新参集殿御造営を計画し、平成十七年十月の竣工を目標に基金募集を行っております。

現在御遺族、戦友の方々をはじめ、多くの方々から貴重なる御芳志をお寄せいただいておりますが、全国的に深刻な経済状況のなか、目標としておりました御奉賛金額には遠く及ばず、予定の期日での竣工は困難な情勢となってまいりました。

つきましては、新参集殿御造営計画を五年間延長し平成二十二年十月の竣工と致し、奉賛金の募集を二期に分けて行い、総額五千万円を目標に奉賛金を募ることとなりました。

そこで、第一期募集と致しまして二千万円を目標に、平成十三年十月から平成十八年度まで主に御遺族、戦友の方々へ御奉納を募ることと致し、第二期募集と致しまして三千万円を目標に、平成十九年度から平成二十二年十月まで県内外の企業、団体、一般崇敬者の方々へ御奉納を募ることと致しました。

これまで御奉納いただきました御遺族、戦友の方々をはじめ、多くの皆様方には誠に申し訳ございませんが、今後も当初の計画でありますが「御遺族、戦友の方々並びに一般の方々が安心して参拝できるための施設」造りを目標に、職員一同取り組んで行く所存でございます。

何卒ご理解いただき、これまで同様御支援、御協力を賜わります様お願い申し上げ、新参集殿御造営計画延期のお知らせと致します。

今に残る激戦の跡

［海軍司令部壕］

戦況の逼迫が伝えられるなか、昭和十九年海軍は那覇市の西岸に位置する小禄海軍飛行場の守備を主な任務とする沖縄方面根拠地隊（以下沖方根と呼ぶ）を組織し、翌昭和二十年一月大田實海軍少将（千葉県出身）が指令長官として任命された。

この小禄海軍飛行場は、昭和八年に沿岸防衛を目的に海軍によって作られた小型機発着用の飛行場であったが、後に台湾と本土とを結ぶ民間定期航空路の中継地として拡張され、さらに昭和十七年に再び海軍所管となり、滑走路二本を備える県内最大規模の飛行場となったものである。

「海軍司令部壕」は、その小禄海軍飛行場守備の為、豊見城村（現豊見城市）の高台に構築された壕で、昭和十九年八月に山根巌少佐以下三、〇〇〇名の将兵により、わずか四ヶ月で完成したといわれ、壕内には司令部室、幕僚室、作戦室、暗号室、医療室、下士官及び兵員室等が構築されていた。

壕内司令部室跡

昭和二十年四月一日に沖縄本島に上陸した米軍は、当初破竹の勢いで第三二軍司令部のある首里へ侵攻していたが、嘉数（現宜野湾市）、前田（浦添市）、そして安里五二高地（シュガーローフ）など、守備隊の主要陣地において壮絶な攻防戦が繰り広げられ、正に一進一退の様相を呈していた。

当時、沖方根には約一万の兵士が配置されていたが、その約三割は戦闘訓練を受けていない防衛隊員註が占めており、実際の戦闘能力は必ずしも高いとはいえなかった。そのため陸軍同様、持久作戦を採るべく、壕付近を地雷や迫撃砲陣地でかためていた。

五月に入り、次第に戦況が悪化し守備隊兵力も徐々に低下していくと、第三二軍司令部は事前に取り決められていた陸海軍中央協定に基づき、海軍からも陸戦要員の抽出を要請してきた。大田司令官は、躊躇しながらも結果的に沖縄の守備に貢献できると判断し、主力である山口大隊、丸山大隊、勝田大隊、迫撃砲隊

など、総計二、五〇〇名の主力部隊を陸軍部隊へ抽出し、さらに精鋭の陸戦隊も守備隊として送り出した。

これらの海軍部隊は各戦闘においてめざましい戦果をを挙げ、海軍の名を広く知らしめることとなった。しかし、この抽出により沖方根は保有していたほとんどの迫撃砲及び軽火器の約三分の一を失い、また残った兵士のうち陸戦訓練を受けていた者はわずか二、五〇〇名程度となった。

六月四日早朝、米軍は小禄飛行場北部に上陸を開始した。しかしそれを迎え撃つ沖方根は、工兵を中心とする後方部隊で、しかも陸軍との連絡ミスにより、重火器等を破壊し南部へと一旦退却し、再び小禄へ戻ったため、使用できる兵器はわずかであった。

大田司令官は、自ら前戦近くの航空隊小禄派遣隊戦闘指揮所（在赤嶺）へと移動し、作戦指揮を執り貧弱な兵力ながらも、皆勇敢に戦い、米軍の侵攻を阻止し続けたのであった。

しかし米軍は空からの爆撃支援のもと、七十両以上の戦車を伴いながら侵攻し、同日夕刻には、赤嶺及び小禄西側地区まで侵攻してきた。

それに対し、沖方根では夜間切り込みや、温存していたロケット砲を使い、前戦を阻止し続けたのであった。

五日も米軍は空からの爆撃支援のもとに、戦車約七〇両を以って侵攻してきたが、沖方根は戦車へ急造爆雷を背負いながら肉弾攻撃を行うなどして、米軍の進出を阻止し続けたのであった。

赤嶺にある海軍部隊壕の入口

六日、小禄西側、金城、赤嶺付近で激戦が続く。同日大田司令官は豊見城の海軍司令壕に身を移し、その夜海軍次官宛に次のような電報を送っている。（一部のみ引用）

〇六二〇一六番電（六日二〇時一六分電報）

「県民は青壮年の全部を防衛召集に捧げ残る老幼婦女子のみが相次ぐ砲爆撃に家屋と財産の全部を焼却せられ僅に身を以て軍の作戦に差支えなき場所の小防空壕に避難尚砲爆撃下●●●風雨に曝されつつ乏しき生活に甘じありたり…中略…沖縄県民斯く戦へり　県民に対し後世特別の御高配を賜らんことを」

この電報は本来県知事から送付すべき内容ながら、すでに県には通信

当時の壕内の様子図

力が無く、また三二軍司令部にもその余力は無いと判断し、知事の依頼ではなく、大田司令官が独自に送付した長文の電報である。この電報により、死没した幾十万の一般住民の御霊が慰められたことであろう。

六月八日すでに小禄西方高地は米軍に占領され、赤嶺陣地は崩壊寸前であった。また金城、具志方面でも激戦が続いた。翌九日小禄地区は東西より敵が迫り、指令部壕に近い豊見城村宜保陣地が占領された。

十日、米軍の攻撃は沖方根指令部に達し、戦車を伴い四方から攻撃を受け、それは翌十一日まで続いた。それに対し沖方根は、接近戦にて肉弾攻撃を行い勇敢に戦ったが、指令部の陥落は時間の問題となった。

十一日夜、大田司令官はいよいよ最後の段階として、三二軍牛島司令官へ「敵戦車群は我が司令部洞窟を攻撃中なり　根拠地隊は今十一日二三三〇（二三時三〇分）玉砕す従前の厚誼を謝し貴軍の健闘を祈る」旨の電報を送り、その夜を以って、沖縄における海軍部隊の組織的戦闘は終了した。なお、大田實司令官はその後も司令部内に留まり、十三日午前一時司令部壕内にて自決した。

現在この壕は、「旧海軍司令部壕」として整備され、史跡公園として一般に公開されており、毎年多くの観光客が訪れている。しかしその裏手には、当時の兵士達が小銃や竹やりを持って敵へと向かっていった出撃口がひっそりと残されている。

幕僚が手榴弾で自決した時の破片あと

裏手にある出撃口

なお毎年五月二十七日の海軍記念日には、隣接する海軍戦没者慰霊之塔にて海軍関係者によって慰霊祭が行われている。

海軍慰霊の塔

※参考文献
「戦史叢書 沖縄方面海軍作戦」
一九六八年　防衛庁防衛研修所戦史室　著
「日米最後の戦闘」
一九六八年米国陸軍省　編　外間　正四郎　訳

註―防衛召集により編成された沖縄住民を中心とする部隊で、十七歳以上四十五歳までの男子が対象とされた。主たる任務は、陣地構築や弾薬運搬などで、戦闘訓練は受けず武器の供与もなかった。

社務日誌抄
（平成十四年九月～平成十五年八月）

九　月
- 三　日　福井県神社庁正式参拝
- 一五日　敬老祭
- 二三日　秋分祭
- 二三日　修養団捧誠会正式参拝及び神石祭参列・奉仕

十　月
- 十二日　那覇まつり成功祈願祭
- 一七日　神嘗祭
- 二二日　宵宮祭、霊璽簿奉安祭
- 二三日　第四十四回秋季例大祭
- 二四日　東京都遺族連合会正式参拝
- 二五日　産業まつり成功祈願祭
- 二八日　兵庫県遺族会正式参拝
- 三〇日　岡山県遺族連盟正式参拝

十一月
- 三　日　明治祭
- 四　日　因伯の塔慰霊祭奉仕
- 五　日　山口県遺族連盟正式参拝
- 六　日　徳島県遺族会正式参拝
- 七　日　福島県遺族会正式参拝
- 七　日　広島県遺族会正式参拝
- 八　日　熊本県遺族連合会正式参拝
- 八　日　ふくしまの塔慰霊祭奉仕
- 一〇日　長崎県戦没者慰霊奉賛会正式参拝
- 一〇日　北海道連合遺族会正式参拝
- 一二日　静岡県遺族会正式参拝
- 一三日　青森県遺族連合会正式参拝
- 一三日　佐賀県遺族会正式参拝
- 一三日　岐阜県遺族会正式参拝
- 一四日　高知県遺族会正式参拝
- 一五日　土佐の塔慰霊祭奉仕
- 一五日　奈良県遺族会正式参拝
- 一六日　福井県遺族連合会正式参拝
- 一八日　香川県遺族連合会正式参拝
- 一九日　茨城県遺族連合会正式参拝
- 二〇日　富山県遺族会正式参拝
- 二〇日　三重県遺族会正式参拝
- 二三日　新嘗祭
- 二四日　埼玉県遺族会正式参拝
- 二五日　神奈川県遺族会正式参拝
- 二六日　和歌山県遺族連合会正式参拝

十二月
- 三　日　靖国神社祢宜小田欣一様正式参拝
- 一一日　奈良県傷痍軍人会正式参拝
- 一八日　靖国神社権宮司三井勝生様正式参拝
- 二三日　天長祭
- 三一日　大祓式・除夜祭

一　月
- 一　日　歳旦祭
- 三　日　元始祭
- 一三日　成人祭
- 一六日　天皇陛下御病気平癒祈願祭
- 二五日　航空自衛隊那覇基地救難隊
- 太鼓部新年奉納太鼓

二　月
- 二　日　京都の塔奉賛会正式参拝
- 三　日　節分祭
- 八　日　日本青年遺骨収集団正式参拝
- 一一日　紀元祭
- 一七日　祈年祭
- 二〇日　札幌市連合遺族会正式参拝
- 二四日　山形県神社庁正式参拝
- 二八日　北海道八雲町遺族会正式参拝

三　月
- 四　日　北海道沖縄会正式参拝
- 八　日　かつおぎ会正式参拝
- 一八日　愛媛県遺族会正式参拝
- 二一日　春分祭

四　月
- 一五日　山紫会板垣様正式参拝
- 二二日　霊璽簿奉安祭・宵宮祭
- 二三日　第四十五回春季例大祭斎行
- 二六日　大阪府遺族連合会自由参拝
- 二九日　昭和祭

五　月
- 三　日　憲法記念日祭
- 一五日　復帰記念祭
- 二三日　解脱会青年部正式参拝

六　月
- 一九日　栃木県神社庁正式参拝
- 二二日　独立歩兵第一三大隊正式参拝
- 二二日　埼玉県遺族連合会正式参拝
- 二二日　霊璽簿奉安祭
- 二三日　沖縄戦戦没者総合慰霊祭
- 三〇日　大祓式

七　月
- 一五日　殉国英霊顕彰祭（みたま祭り）
- 二四日　正山流吟詠会正式参拝

（毎月一日、二十三日に月首祭、月次祭を斎行）

御奉納いただきました

奉納千羽鶴
（日本電気工業職員一同様より）

特産木「コブ」
阿部　辰巳氏所有（同氏より）

昭和天皇以下陸海将校御写真
故長田　朝好氏所有（長田トシ子様より）

寄贈図書
（平成十四年九月～平成十五年八月）

- 「あ、沖縄鎮魂の譜」　木村　仁寿　編発行（発行者より）
- 「復刻版　東京裁判の正体」　菅原　裕　著（矢崎好夫様より）
- 「新装復刻版　日本国憲法失効論」　菅原　裕　著（矢崎好夫様より）
- 「あこがれの予科練」　横山　正男　著（著者より）
- 「神々に奉仕して」　石川　忠良　著（群馬県護国神社）
- 「靖国神社一問一答」　石原　藤夫　著（著者より）
- 「石原十年日記」　石原出版社　編（日本会議）
- 「紺碧のかなたに　―沖縄戦本島の記録―」　内田　弘　著（日本会議）
- 「どこまでわかるタマタイ国」　三好　誠　著（著者より）
- 「昭和天皇」　出雲井　晶　著（昭和神宮御創建期成会）
- 「戦場に生きる　―悌梧学徒の体験記―」　石川　忠良　編発行（稲福マサ様より）
- 昭和高女同窓会　編発行（同会より）
- 「学徒看護隊　防衛要員　防空補助隊　戦場記」　なごらん会　編発行（同会より）

御奉納品物
- 額入写真　故長田朝好氏所有（長田トシ子様より）
- 特産木「コブ」　阿部辰巳氏所有（同氏より）
- 日本酒一斗樽（日本電気工業）
- 千羽鶴並びに日本酒一斗樽（龍華会）
- 泡盛　久米島の久米仙六本入（久米島の久米仙酒造）
- 銃剣　有元義高氏所有（同氏より）

玉串料御奉納者名
- 兵庫県尼崎市　㈱多田　代表　多田容幸様
- 大阪府堺市　柳本晃利様
- 岐阜県岐阜市　岡田きよ子様
- 茨城県水戸市　坂場すみ様
- 茨城県水戸市　川上徳子様
- 茨城県水戸市　宇留野浪江様
- 三重県鳥羽市　岡村淑子様
- 三重県鳥羽市　川村えみ様
- 三重県度会郡　中井久雄様
- 山梨県中巨摩郡　小澤寿彦様
- 福岡市南区　秋満純一様・節子様
- 三重県志摩郡　杉木茂樹様
- 石川県石川郡　北村伸一郎様
- 山形県鶴岡市　辻　省三様
- 佐賀県唐津市　遠矢輝彦様
- 札幌市豊平区　豊川エイ様
- 滋賀県滋賀郡　伊藤よし様
- 北海道苫小牧市　前川宗廣様・房子様
- 北海道河東郡　門馬和子様
- 滋賀県守山市　北村たか子様
- 三重県員弁郡　大浦慶子様
- 大阪府箕面市　福永　博様
- 埼玉県桶川市　鈴木武夫様
- 名古屋市中川区　黒田幸和様・昭子様
- 千葉県柏市　小島幸雄様
- 奈良県奈良市　岡　一郎様
- 千葉県城東町　日紫喜末男様
- 静岡県清水市　臼田智子様
- 大崎紀美子様
- 早坂正子様
- 山口紀子様・千寿子様
- 山口和也様
- 瀧　きぬ様

御奉納ありがとうございました。

写真で見る護国神社この一年

秋季例大祭参列の御遺族方

正月風景、ラジオキャスター

大晦日の様子

6月23日三世代で参拝する御遺族

編集後記

・沖縄県護国神社社報「うむい」第四号をお届け致します。

・特集「学徒たちの沖縄戦」には、実際に戦争に参加された学徒の皆様方を始め、多くの方々からのご意見、ご感想を賜わりまして、誠にありがとうございます。

・取材にあたりまして、炎天下にもかかわらず、壕の中や、撤退していった道筋等にご同行いただき、一つ一つ丁寧に当時の様子をご説明いただきました、稲福マサ様、吉川初枝様に篤く御礼申し上げます。

・当時の様子を伺うたびに、今更ながら戦争の悲惨さ、残酷さを実感し、このようなことが世界中で無くなる事を願ってやみません。

発　行　平成十五年十月一日
発行所　沖縄県護国神社
〒九〇〇―〇〇二六
沖縄県那覇市奥武山町四四番地
TEL〇九八―八五七―二七九八
FAX〇九八―八五七―七九一七
編集担当　加治　順人
印刷所　㈲うるま印刷